入学交響曲（未完成）

大熊米子

☆ 子どもの楽章

卒園式もすんで数日、やわらかな午後の陽差しの差込む職員室で、S先生は一人整理をしていた。ふと片付けものの手をとめて窓越しに庭の桜の枝を仰いだ先生は、〝今年は入学式に咲いているかしら、入園式の時はどうかな〟胸の中をそんな気持が走った。以前は四月一日の入学式に間に合ったり、合わなかったりした桜の花が、この頃は都内たいていの学校の入学式が四月五、六日なので、どうかして一夜雨にでも洗われると、げっそり盛りを過ぎてしまう。子ども達の新しいかどでを美しい花で飾ってやりたいという先生の感傷は、毎年今頃この桜の枝を気にしないではいられない。〝あ、来ている来ている！〟S先生は桜の木の隣のぶらんこが、かすかにゆれているのを見て、伸び上って見ると、この間卒業させたばかりのN夫ちゃんが、たった一人でぽんやりした表情でぶらんこに腰かけていた。

〝やっぱり幼稚園はいいらしい〟先生はちょっと嬉しい気持になって、お茶をいれておやつをN夫ちゃんと一しょにしようと思いついた。「N夫ちゃーん、いらっしゃーい、お三時いただきましょう」　窓をあけて大声に呼んだ。びっくりした表情で、しかし余り嬉しそうでもなく、のっそり立ち上ったのを見て窓をしめた先生は、いそいそとテーブルの上を片付けて、お皿やお茶碗を並べている所へN夫ちゃんが入って来た。「今日わ、N夫ちゃん一人で来たの？」「そう」気の抜けたような返事に、ふり返りながら「手を洗っていらっしゃい、おいしいお菓子一しょに食べましょう」と言って先生はおやっと思った。何となくN夫ちゃんの表情がはっきりしていない、時には本気で叱ったこともあるN夫ちゃんは、本来元気坊やのはずであるのに……でも「もう手なんて洗って来ちゃった」と言ってにこりとする様子は、やっぱりいつもの通りなのかもしれない……。

S先生は心をかすめた不審の念を、一瞬に忘れて、話し相手ができた楽しさでN夫ちゃんをちょっとおとな扱いの気持で向かい合った。「N夫ちゃん、学校のお支度もうできた？　制服できたの？」「ん」「そう、よかったわね、ランドセルも買っていただいたでしょう」「ん」「何色？」「……」「茶色かしら？」「……黒」……やっぱり少

しおかしい……とS先生はまた少し雲がかかったような気がした。〝N夫ちゃん学校の事話すの嬉しくないみたいだわ、お母様は卒園式の日にあんなにわが子の進学を喜んでいたのに……〟

N夫ちゃんは、電車とバスを使って通う或る大学附属の小学校に入学することになっていた。そうなるまでの若いお母さまの努力は、先生でさえ目を見はるようだった。だから、多少首をかしげるような行き過ぎた熱心があったけれども、無事入学検定に合格した時は、先生はお母様の気持になって、素直に一しょに喜んで、N夫ちゃんの洋々の前途を祝福してあげたものだった。それが、今日のN夫ちゃんのしぼんだ風船みたいな様子はどうしたことだろう、せっかくおいしいクッキーを無意識に口へ運びながら先生はN夫ちゃんの様子を見つめていた。しかし、天真爛漫に食べている様子はやっぱり子どもらしい……と、「先生、Tちゃん僕の学校と違うんだって……」〝ああやっぱりそうだった〟先生はすっかり判ったと思った。「そう、TちゃんはK学校ね」

「僕、つまんないや」「あら、でも学校から帰って来たら近くだからすぐ遊べるじゃないの」「だめ、勉強で忙がしくなっちゃうから遊べないって」「あら大丈夫よ、一年生はとってもたくさん遊べるわ、幼稚園と同じ位よ、それにN夫ちゃん、電車にもバスにも乗って行かれるからおもしろいわよ、定期持って……、Tちゃんが羨ましがっちゃうわ」S先生には、N夫ちゃんの浮かない原因がだいたい判ってきたので、一生懸命に新しい生活への楽しみを強調して話を交した。でも、心の中はやっぱりN夫ちゃんと同じに重くなっていくのを、どうしようもなかった。誰がなんて言ったって友達が一番いいのだ、こんな淋しい気持でこれから十五、六年も続く学校生活へ出発させていいのかしら……N夫ちゃんが帰ってしまったあと、S先生の耳の底に、「僕幼稚園の方がいいや」と言ったN夫ちゃんのことばが、いつまでもうなっていた。入学式までに、N夫ちゃんのお母様にもお会いして、何とかN夫ちゃんの胸の中を、未知の世界への希望と喜びで満してやらなければ……先生は、また忙しくなる、と思いながら片附け物の手を急がせた。

☆ 母の楽章

ぱったりと道で、買物帰えりのY子ちゃんとお母様に出会った。「あら、Y子ちゃん、何買っていただいたの？」からかうように言った先生の目に、つい数日前に卒業させた子の姿が、ひどく懐しくうつった。お母様も同じ思いらしく、もう早くも立話しの決心を固めたように道の片側に寄って、せきを切ったように話し始めた。「卒業式には、親の方が涙が出てしまって、ろくに御挨拶もしないで帰ってしまって……」

から始まって、初めての子どもではあるし、気の弱い女の子だし、お隣のK子ちゃんは漢字でもう自分の名前がどんどん書けるのに、Y子といったら未だまだ……今も買物に行って、六十円の下敷を買って、百円出したら、おつりがいくらくるかもう判らないんですよ、いくら十円持って行って六円のものを買った時と同じだと言っても、それが判らないんですもの……先生はここまで聞いて危くふき出しそうになった。六十円のものと六円のものと同じだなんてこのお母様にしか判らない事だ……しかし当のお母様は意外の大まじめ、とにかく幼稚園は卒業してしまったのに、小学校にこんなことで行かれるかと思うと、頼り無くて親の方が気がいらいらしてしまうのだそうだ。Y子ちゃんはお母様の愚痴話は聞きあきていると見えて、先に家の方へとんで行ってしまった。S先生は、年下の妹をいたわるような温い眼差しで「お母様、大丈夫ですよ、誰だって皆これから学校に入るんですもの、それから始めていろいろ教えていただくんですよ、順序立ててね……」そしてふと気をかえて「お母様、たしか千葉におばあちゃまがいらっしゃるんでしたわね、お元気?」「ええお陰様で……」何で先生が突然こんな事を?……というように、若いお母様の不審の眼差しを受けて、先生はすばらしい思い付きを話すように弾んだ声で言った。「お母様初孫さんがあんなに大きくなられて、学校に上るようになられたのを、このお休みの中におばあちゃまにお見せしていらっしゃいよ、そうして久し振りにお母様もおばあちゃまのおっぱいをのんでいらっしゃいよ」

本当にS先生自身にも覚えがある。始めて人の子の親になって、可愛いかわいいと自己陶酔に陥入っている時はよいが、何か波があって、矢も楯もたまらなく子どものことが心配になることがある、心細くなることがある、できることなら子どもと一しょに大声で泣きわめいてみたくなることがある。親になる、ということは本当にたいへんなことなのだ。よく背のびして人とつき合うことはないと言うけれど、娘から母になって、背のびしないでいられるものではない、まして始めてわが子が学校へ行く……S先生は長女の入学式に、わが子が皆と一しょに並んで歩いて行くのを見ただけで、のみ込んでものみ込んでも追いつかない涙が溢れた感動を今でも思い出す。S先生は、Y子ちゃんのお母様に優しく言った。「おばあちゃまに甘えていらっしゃい、気が楽になって、Y子ちゃんの入学がただ嬉しくて嬉しくて致し方がなくなってしまいますよ」

この子を、自分の手で、自分の力で育てなければ!! と張り切っているけなげな若いお母様、すっかり一度頑張りと緊張を忘れていらっしゃるがいい、子どもの第一歩を、本当に素直な自然な気持で祝って上げられる境地になった時、若い芽の伸びる、それ自身の偉大な力が判ります……心なしかいそいそとした足どりで帰って行くY子ちゃんのお母様の後姿を、S先生はやさしく見送っていた。